

「東京大学教授・名誉教授等の秋の紫綬褒章受章」

記者会見行われる



(2 ページに関連記事)

目次

特別記事	2
「東京大学教授・名誉教授等の秋の紫綬褒章受章」記者会見行われる	
一般ニュース	3
総長の海外出張、AEARU（東アジア研究型大学協会）学生キャンプ開催及び参加報告書、香港科技大主催学生キャンプ報告、復旦大学主催AEARU学生キャンプ報告	
キャンパスニュース	7
学術研究奨励資金による国際交流助成事業の採択決まる、第26回伊豆・戸田マラソンレース行われる	
部局ニュース	8
総長主催の外国人研究者交流会が開かれる、総合研究博物館小石川分館の開館、建物新営に伴う農学部構内の遺跡調査行われる、大学院農学生命科学研究科・農学部外国人留学生見学旅行実施される、大学院総合文化研究科・教養学部、大学院数理科学研究科合同で消防訓練が行われる、東京大学教育学部派遣生の会研究集会開催される、平成14（2002）年度大学院学際情報学府修士課程入学試験結果について、医科学研究所で慰霊祭行われる、ワークショップ「ジャー	

ナリスト教育を科学できるかーその実験と教訓」終わる、駒場Ⅱキャンパス（駒場リサーチキャンパス）防災訓練、柏キャンパス三部局合同一般公開開催

掲示板	15
東京大学憲章に関するパブリック・コメントの実施を終えて、春期環境整備週間決まる、東京大学教官懇話会のお知らせ、東京香港文化研究会 第1回公開講演会のお知らせ、フィレンツェでのシンポジウム、「教養学部報」第451（11月7日）号の発行、大学院情報理工学系研究科創立記念行事、駒場祭でシンポジウムを開催、生産技術研究所 第10回技術発表会開催される、史料編さん所の特別展の準備すすむ、国際シンポジウム「歴史学と史料研究」のお知らせ、東京大学物性研究所国際シンポジウム一般講演会開催される、保健センター・公開健康講座、第2回東京大学公開学術講演会の開催、本郷地区構内（浅野地区、弥生地区を含む）における警備体制の整備充実について	
事務連絡「人事異動」	21
訃報（磯部孝名誉教授、杉浦克己名誉教授、塩谷繁雄名誉教授）	22
淡青評論「生命倫理サロン」	24

≪ 特別記事 ≫

「東京大学教授・名誉教授等の秋の紫綬褒章受章」記者会見行われる

平成13年度秋の紫綬褒章受章の東大関係者6名

(榊 裕之教授、岡村 甫名誉教授、坂部 惠名誉教授、瀬戸治男名誉教授、岡崎廉治元教授、永井美之元教授)の記者会見が行われた。なお、岡村 甫名誉教授は、所用のため、出席することができなかった。



11月1日に行われた記者会見

榊 裕之教授が紫綬褒章受章

生産技術研究所の榊裕之教授が、本年秋の紫綬褒章を受章されました。今回の受章は、微細な半導体構造中での電子の量子的な波動性の解明とその情報通信技術への応用に関する先生の先駆的なご研究と多大な業績に対して贈られたものです。

電子は、その量子的な波長(10ナノメートル程度)に近い寸法の微細構造に閉じ込められると、共鳴箱の中の音波のように特定の振動状態となり、従来にない新しい性質を示します。榊先生は、この事実がいち早く着目され、LSIに不可欠なシリコン電界効果トランジスタや、半導体超薄膜を積層化した構造において、電子が量子的に制御できることを世界に先駆けて示されました。こうした研究は、超高速トランジスタや量子井戸レーザや新しい赤外光検出素子など、高性能デバイスの誕生と発展に寄与するとともに、固体物理学の最前線を拓く上でも重要な役割を果たしています。先生は、さらに電子の波をより強く閉じ込めた量子細線や量子箱の概念を提唱して、高性能デバイスや新機能素子実現への応用可能性を世界で初めて提案され、この分野で先導的役割を果たしておられます。これら量子ナノ構造の物理とデバイス応用の研究は、約四半世紀に渡り発展を続けており、現在も最もホットなテーマのひとつです。

(生産技術研究所 平川一彦)

岡村 甫名誉教授が紫綬褒章受章

元東大野球部投手(17勝)であり、また元工学系研究科長で現在、高知工科大学学長の岡村甫名誉教授(63)が、本年度秋の紫綬褒章を受章されました。

岡村先生は、1988年に自己充填性を有する高性能コンクリートの開発に成功、それまでの社会基盤施設の建設施工法に一大改革をもたらすとともに、施工環境に左右されない長寿命構造の実用化に成功されました。この技術は現在、SCCと略称され、我が国から世界に発信した基本技術として定着し、欧州、アジア諸国でも実用化が進んでいます。また、鉄筋コンクリート動的非線形応答解析システムの研究開発に1980年以来取り組まれ、社会基盤施設の耐震設計の向上に尽力され、世界最大のLNG貯蔵施設や原子力発電地下施設等にいち早く応用され、耐震性向上と大幅なコストダウンにつながっています。社会の器の安全と耐久性に関わる基本技術に、直球勝負で突破口を開いたことが今回の受章につながりました。(大学院工学系研究科 前川宏一)

坂部 惠名誉教授が紫綬褒章受章

本学名誉教授(人文社会系研究科哲学)の坂部惠氏が、本年度秋の紫綬褒章を受章された。

1960年代以降の欧米で、言語行為論、構造主義、解釈学などによる、言語をはじめとする人間文化の基底を問い直す努力がなされたが、先生はこれらの動向を取り入れ、日本文化のうちに新しい方法の実地の適用を試みられた。そして、日本語は情緒に流れて哲学的思索に適さないという根強い先入見に抗して、「おもて」「かげ」「あわい」「ふれ」などのやまとことばに則して考えることが可能であることを証明し、日本思想の伝統と西洋現代哲学との接点を探られた。その仕事は、文学、社会学など隣接の研究者に広く反響を呼び、更に、西田幾多郎、和辻哲郎、九鬼周造等、明治以後の日本の哲学者たちの仕事を再評価し更めて歴史的に位置づけ、その生産的継承をはかられた仕事とともに、国際的にも斬新な日本文化論として高く評価されていて、このことが今度の受章の理由の一つともなった。また先生は現在、9世紀のカロリング朝ルネッサンス以来の西洋哲学の展開を「ヨーロッパ的世界の哲学」として、四つの転換期ももちつつ基本的にひと続きと見る哲学史観の開拓に努力を傾注しておられる。(人文社会系研究科 松永澄夫)

瀬戸治男名誉教授が紫綬褒章受章

本学分子細胞生物学研究所・前教授の瀬戸治男名誉教授(61)に平成14年度の紫綬褒章が授与された。

受章の対象となった研究は、微生物が生産する有用活性物質の生合成研究を中心に展開したものであり、その業績は有機化学から生化学、分子生物学を含む広範な領域に至っている。瀬戸名誉教授は、¹³C標識前駆体から生合成される物質の¹³C-¹³CカップリングをNMRで解析することにより、生合成機構を解析する手法を世界に先駆けて開発し、この手法を用いて多くの抗生物質の生合成経路を解明した。また、分子内に炭素-リン結合を有する特殊な抗生物質ピアラホスおよびホスホマイシンについて、C-P結合生成過程を含む全生合成経路を明らかにした。一方、最近発見された新しいイソプレノイド

生合成経路「非メバロン酸経路」に関して、その前半部分の反応、酵素、遺伝子を明らかにするとともに、この経路が多くの細菌や植物の葉緑体などに広く分布していることを示した。本研究成果は非メバロン酸経路の阻害剤を用いたマラリアの治療研究などへ応用展開されている。

(分子細胞生物学研究所 早川洋一)

岡崎廉治先生が紫綬褒章受章

本学大学院理学系研究科元教授、現日本女子大学教授である岡崎廉治先生が平成13年度秋の紫綬褒章を受章された。

岡崎先生の今回のご受章は有機化学、なかでも有機ヘテロ原子化学分野の発展のために長年尽力されたご功績に対して授与されたものである。

岡崎先生は、新規な立体保護基の開発とそれを用いた速度論的安定化による含高周期ヘテロ原子多重結合化合物の合成研究および新しい反応場としてのボウル型やカプセル型分子の開発研究、さらに含高配位典型元素複素4員環化合物に関する研究により、有機化学の基礎的分野において顕著な業績を挙げられた。特に、独自に開発されたかさ高い置換基を活用することにより、高周期14族元素 - 16族元素間二重結合化合物であるいわゆる「重いケトン」をはじめとして、安定同位体としては最も重い元素であるピスマス - ピスマス間二重結合化合物であるジピスマテンや含ケイ素芳香族化合物等の種々の不安定化合物を合成・単離されたことは内外で高い評価を受けている。(大学院理学系研究科 川島隆幸)

永井美之先生が紫綬褒章受章

医科学研究所元教授の永井美之先生が本年度の紫綬褒章を受章された。永井先生は永年にわたってRNA型ウイルスの複製と病原性発現の分子機構の研究に携わり、その学術上の功績は以下の4つに大別される。

1. パラミクソウイルス科の代表的ウイルス、ニューカッスル病ウイルスの強毒株では、感染開始に必須のウイルス膜融合糖蛋白が全ての細胞で切断され活性化されるのに対し、弱毒株ではごく限られた細胞種が分泌する特殊なプロテアーゼによってのみ切断され活性化されることを発見し、強毒株では致死性の全身性感染を示すのに対し弱毒株では一部臓器に限局した良性感染を示す理由を解明した。これは、複雑かつ高次の病原性という概念にウイルス学史上はじめて分子基盤を与えるものであった。
2. マイナス鎖RNAをゲノムとして持つため遺伝子操作系の確立が遅れていたパラミクソウイルス群において、その代表格であるセンダイウイルス全ゲノムのcDNAよりウイルスを回収する系を確立した。これにより、センダイウイルス各遺伝子を思いのままに改変(操作)し、各遺伝子がウイルスの複製と病原性の発現にいかなる役割を演ずるかを次々と明らかにした。すなわち、遺伝子操作系の確立により、パラミクソ

ウイルス研究の革新をおこなった。

3. 上記2のセンダイウイルスの遺伝子操作系により、本ウイルスが外来遺伝子を効率良く発現させるのに適していることも明らかにした。すなわち、センダイウイルスに治療用の遺伝子やワクチン抗原用の遺伝子を搭載し、遺伝子治療やワクチン戦略に役立てるという新技術の可能性を証明し、わが国のバイオテクノロジーに新局面を開いた。
4. ヒトやサルエイズウイルスの表面は夥しい数の糖鎖で被覆されている。サルエイズウイルスの23個の糖鎖を個別に欠出させ、糖鎖のウイルス感染能への貢献度に見事な部位特異性があること、5個の糖鎖を欠失したウイルスはエイズ特有の活発な持続感染を起こし得ないこと、つまり、宿主の感染防御能に抗し得なくなること、この弱毒化ウイルスがサルに野生株に対する高度の感染防御免疫を誘導できることを示した。すなわち、世界的に注目度の低かった糖鎖を焦点にエイズ病態とワクチン開発の研究に新しい局面を開いた。(大阪大学微生物病研究所 塩田達雄)

≡ 一般ニュース ≡

総長の海外出張

佐々木総長は、平成13年11月23日(金)~平成13年11月25日(日)の期間、東アジア四大学フォーラム・ハノイ会議出席のため、ベトナム社会主義共和国へ出張する。

AEARU (東アジア研究型大学協会) 学生キャンプ開催及び参加報告書

東アジア研究型大学協会(The Association of East Asian Research Universities, AEARU)は、東アジアの5つの地域(日本、韓国、中国、台湾、香港)の主要な研究型大学の学術交流を目的として1996年に設立され、本年1月に設立5周年を迎えた。現在17の大学(大阪大学、京都大学、東京大学、東京工業大学、東北大学、筑波大学、浦項工科大学、韓国科学技術院、ソウル国立大学、清華大学(北京)、中国科学技術大学、南京大学、復旦大学、北京大学、香港科学技術大学、清華大学(新竹)、台湾大学)が加盟しており、2000年1月から東京大学総長が会長を務めている。

AEARUの学生キャンプは、主に学部学生を対象にした事業で、毎年夏2つのメンバー校で開催されている。開催校の学生が中心になりプログラムを企画し、特定のテーマについて討議・研究を行うとともに、交流をとおして相互理解と親交を深めることを目的としており、大変人気のある事業となっている。

本年度は、7月29日から8月4日まで香港科学技術大学で「技術と社会」をテーマに、8月5日から8月11日まで上海の復旦大学で「インターネットと21世紀」をテ

マにした学生キャンプがそれぞれ開催され、本学からは以下のとおり参加した。

香港科学技術大学主催キャンプ：

若江悠（法学部4年）、戸川滋廊（工学部4年）、三輪京子（農学部4年）、上山聡子（経済学部3年）

復旦大学主催キャンプ：

梅村元史（法学部4年）、木村裕樹（医学部4年）、徳田顕人（教養学部3年）

なお、本件についての問い合わせは、事務局研究協力部国際交流課（内線22086、22430）まで。

香港科技大主催学生キャンプ報告

大学の掲示板には、新たな出会いや体験ができる機会が潜んでいる。

2001年7月29日から8月4日まで香港科学技術大学で開催されたAEARU学生キャンプに参加した。今年の香港のテーマは「技術と社会」である。東アジアから13校約50人の大学生が集まり、テーマに関する学術的な活動と参加者間の交流を深める活動が行われた。香港は連続して過去3年間学生キャンプを開催しており、快適なキャンプ生活を送ることができた。私は昨年、東京大学で開催されたAEARU学生キャンプにプログラムを企画する委員として参加し、その参加者達の熱気に触れ、ぜひキャンプへ参加したいと思った。また、農学部で生命科学を専攻している私にとって「技術と社会」は強い関心があるテーマであり、同世代の学生と率直に意見交換をしたいと考えていた。

プログラムは学術的活動、見学・観光、交流活動で構成されていた。スケジュールは全体として過密であり、暑さや慣れない食べ物のせいもあり、なかには体調を崩す人もいた。

〈学術的活動〉

学術的活動では、講演が2回とコンテストが行われた。講演は香港科技大の社会科学の先生による「技術と社会」という概念自体についての講義と、香港で国境なき医師団の事務をしている日本人による講演であった。コンテ

ストでは4グループに分かれ、IQクイズを解いて「資金」をつくり、紙で街の模型を作製する、まちづくりシミュレーションゲームを行った。

まず、このプログラムの内容と流れに対しては不満を言わざるを得ない。1つ目の講義はハイテクのみを想像しがちな「技術と社会」に対して違う概念を提示しており、講義自体は興味深いものではあった。しかし、2つ目の内容は国境なき医師団の活動紹介であり、講演それ自体は関心を持てたが、テーマの「技術と社会」とどのように関連があるのかが全く不明であった。コンテストは結局のところゲームであった。他の多くの参加者も感じたことであるが、意見交換・発信のディスカッションの場がぜひとも欲しかったと思う。企画の流れも一つ一つの企画には関連性がなく、講演の内容がコンテストに生かされるということもなかった。大学主催のキャンプなので、参加者の能力が発揮されるような内容が大学の先生や院生などの協力の下、企画されるべきだと思う。

〈見学・観光〉

香港科技大の研究室訪問が2回あり、Engineeringの建築物の災害時シミュレーション、再生コンクリートの利用、生体内のイメージングなどを行う3研究室とScienceの漢方薬効の原因遺伝子の同定、レーザーの使用による物質の解析などを行う3研究室を見学した。見学で感じたことは、科技大であるためか研究が社会への応用に直結していることと、できて10年の新しい大学のため、実力のある先生を集めて、大学の質や評価を高めようという努力がなされているのだろうということである。

会社訪問は香港にある半導体製造の工場と石油をリサイクルする工場を見学した。また香港の観光に3回出かけた。Lei Yue Munで海鮮料理の夕食後Victoria Peakへ行ったり、Times Squareで点心の昼食後、各班で自由観光をした。HK Museum of Coastal MuseumとHong Kong Heritage Museumの見学も行った。観光で最も印象的であったのは、グループごとの自由時間に行った香港中央図書館である。この図書館は最近完成されたばかりで、10階建てでとても広く、どの階にも検索用とインターネット接続用のパソコンが多く並べられ、設備がとても充実していた。2階はフロア全体が児童書



参加者全員の集合写真



海鮮料理を班ごとに楽しむ

を豊富に揃えた子供用の図書館となっていた。その内装は子供が楽しめるような、動物や植物の装飾であふれていた。そして、子供が難なくパソコンを操作している姿を見るにつけ、日本の設備の遅れ、教育の遅れを危惧させられた。

〈交流活動〉

交流の活動は大変充実しており、大学紹介、オリエンテーションゲームや香港式BBQ、室内でダンスをするキャンプファイア、タレントショーなどが行われた。多くはグループ単位で行われ、グループ内の親交はとても深まった。各大学で行う大学紹介とタレントショーは事前準備を行い、大学紹介では私達自身で撮影した大学の風景や日常生活のビデオが好評であった。タレントショーでは日本の時事の紹介を兼ねて、朝起きられない大学生、授業中に携帯電話を鳴らす光景、女性専用車両の導入をコントにして演じた。他の日本の大学では東北大が忍者や侍の時代劇を、京都大が阿波踊りをしていた。韓国の学生が韓国のゲームや新入生のお酒の飲み方を紹介していたのが印象的である。

大学の寮と学食を利用した生活が送れたことは、現地の生活を理解するのにとてもよかったと感じている。また、多くの友人ができたことが最も大きな喜びである。特に印象深いのは大陸の中国人の話で、奨学金が出るアメリカ留学への応募や両親の経済状態、大学の設備の不十分さ、試験勉強での競争など本音を聞くことができた。実際は「技術と社会」に関するディスカッションをすることはなかったが、美味しいものをたくさん食べ、英語で語り合え、参加者達と良い関係を結ぶことができたこの猛暑の7日間は忘れることができない思い出となった。

最後に、このような有意義で貴重な機会が学部学生全員に開かれていることを強調したい。また、私自身が幸運にも参加できたことに、大変感謝をしている。

(文責：農学部4年 三輪京子)

復旦大学主催AEARU学生キャンプ報告

2001年のAEARU学生キャンプ(Topical)は「インターネットと21世紀」というテーマで8月5日から11日まで、中国・上海にある復旦大学で開催された。復旦大学は1905年創立、国家重点大学指定の、中国を代表する総合大学のひとつである。このキャンプに、本学からは前述の3名が参加した。それぞれ、大学の掲示板で学生を派遣するこのキャンプの存在を知り応募、選考ののち幸運にも参加する機会を得た。韓国、台湾、中国大陸、日本、香港の他13大学からの約40名の学生たちと1週間、日夜ぶっ続けの濃密な交流を行ってきた。

■ディスカッション

ディスカッションはこのキャンプの主なイベントの1つである。東大からの参加者は『情報通信白書』(通産

省)等の資料を購入し、主な論点を整理してからこのキャンプに乗り込んだ。他のプログラム同様、ディスカッションも決められた四班の班ごとで行われた。各大学からの参加者たちは、いわゆる「地アタマ」の良い、かつ、気さくで明るい学生たちばかりであった。ただ、ディスカッションが始まると活発に様々な意見が出るが、どうにも議論らしくならずブレイクストーミングの域を出ないワイワイガヤガヤに終始してしまい、意気込んで参加した私たちには多少拍子抜けの感があった。(木村)

しかし、ディスカッション中の雑談からは、各国のIT事情を垣間見ることができ、大変有意義であったし、また、各国の議論のスタイルや意見表明の仕方も観察できた。(梅村)

各班でのディスカッションの後、他の班の前でその成果を発表するという形式がとられたが、趣向をこらした発表は特に面白かった。私の班ではリーダーなどの数人のおかげで議論はうまく進み、有意義だったと感じた。また、初日の大学紹介のスピーチにおいては、香港と台湾、中国大陸(こちらは人数が多く、人による差もあったが)からの学生の英語での発表能力の高さに舌を巻いた。私の見聞きした事から一般論を導くことはできないが、個人的には大変刺激になる出来事だった。(徳田)

■ホームページ作成コンテスト

ディスカッション内容の紹介も兼ねて、各班で自分たちの班のホームページを作成し、その出来栄を競い合った。パソコンが各班1台しか使えなかったことと時間があまり取れなかったことで完成度はもう一步であったが、各班のチームワークが発揮され、絆が深まった機会であった。(木村)

また、ITという共通の手段を使うことで、同一平面上での自己表現ができるという事実は、コミュニケーションの多様化による国際理解の推進剤となることは必至であると考えた契機となった。(梅村)

私の班では私ともう一人が中心になって作成したが、学生をとりまくネットワーク環境について自分の大学との違いを体験的に実感した。(徳田)



ディスカッションの合間に

■隣国の文化

初日から驚かされたのは、特に中国の学生が日本のドラマや映画にとても精通していることであった。ビデオCDなどでみんなよく見ているのである。自分の名前(木村)を言うと「あのdrama starキムラタクヤと同じnameね」と返ってきたし、宇多田ヒカルを歌える女の子も大勢いた。逆に、私たちが隣国の現代文化にあまりに疎いことを痛感した。また、漢字というものは東アジアに共通して根付いている文化であることを再認識した。日本人と韓国人は「中国語」を使えないグループになるが、それでも至るところにある漢字の単語を引っ張り出して「日本語ならこういう意味で、発音は...」「韓国語なら...」と皆で楽しんでた。(木村)

当時、靖国参詣問題や教科書問題が話題となっていたが、中国や韓国からの参加者から個人的に質問があり、日本の状況を自分なりに伝える場面があった。しかし、彼らは個人的意見を言っているというよりは、事実の確認をしようとする、とか、政府の行動を自分たち民間は違う、などの態度をとっているようであった。また、最終日のパーティー等の出し物を始め、日常の仕草から変な日本人が来たと思われたかもしれないが、日本の文化を伝える機会は多かったように思う。(梅村)

■キャンプ全体を通じて

毎晩、班で一部屋に集まり語るなど、“深い”交流ができたことは特に印象深いだが、ここで全体を通じて感じたことを述べたい。キャンプに参加して最も印象的だったのは参加者が皆、人としてとても魅力的だったことだ。個人的には、外国の学生と友達になることは米国での経験があり、全く初めてではなかったのだが、今回の体験は大変特別だった。皆、本当に親切だったのには感銘さえ受けた。また「勤勉でエネルギー」というキャンプ前に持っていたイメージについて、やはりそうなのだなと感じた。キャンプ前、挨拶の言葉すらほとんど知らなかったが、キャンプに参加し、私は自然と中国の社会・文化についてよりよく知りたいと思うようになった。他に、多くの学生が、米国やヨーロッパへの留学を真剣



各国からの参加者

に考えているということも印象に深い。また、話していて社会制度や経済レベルの違いなども強く感じた。例えば、中国では男女とも数週間の軍事訓練があり、韓国では男子に2年強の徴兵がある(近年は、いわゆる“軍隊”でイメージされることをせず、IT企業に所属し軍事目的の技術開発をすることで代わりにすることも可能だそうで、一部多様化しているようではあるが)。上海の街を訪れた感想としては中国の発展の中心とも言うべき都市だったこともあり、経済発展の勢いを至るところで感じた。ただ結局行きつく所はどこも同じになってしまうのはどうなのか、とも感じたし、発展に伴う負の面への不安もある。(徳田)

■インターネット時代の海外との交流

キャンプが終わった後もメール、手紙、ICQなどで非常に活発なやりとりが続いている。まさにこのキャンプのテーマ「インターネットと21世紀」の通り、これからは電子媒体によって世界がより小さくなり、海外の学生たちと情報の交換、議論、相互理解を重ねてゆける時代である。私たちは今後も共通の文化、メンタリティーを持つ隣人たちとの交わりを大切にしたい。それがこのキャンプに参加させていただいた私たちの責務であると考えている。(木村)

例えば、写真をホームページで公開したり、CD-ROMで送ったり、そして、多くの電子メールと、帰国後の交流においても、インターネットは、重要なコミュニケーション手段となっている。(多少海外から手書きの手紙が届く嬉しさは失われたように思う。)そして、今回のキャンプでの最大の収穫である東アジアの友人達は、遠くに離れているが、実は近くにいるように感じる今日この頃である。(梅村)

電子メールなどでキャンプ終了後も個人的関係が続けられることは大変幸せで有難いことと強く感じている。またキャンプ自体、つまり東アジア5地域の学生が一同に会し学術的・人間的交流をするということは、60年ほど前にはまったく想像できなかったことを考えると、今という時代のありがた味を痛感する。今、われわれは国としては近隣諸国との間に政治、外交上の問題を抱えているが、個人レベル、また大学レベルでの交流がこうした状況の改善に寄与できればと考える。今回、個人ではとても実現できないような体験をする機会を与えていただいたことを本当に感謝している。キャンプをきっかけに特に言語に興味を持つようになった私は、日本と近隣諸国との間の悠久の交流の歴史についての認識が変わり、新鮮な驚きを覚えている。(徳田)

(文責：教養学部3年 徳田顕人)

≡ キャンパスニュース ≡

学術研究奨励資金による国際交流助成事業の採択決まる

平成13年度国際交流助成事業のうち次の3事業について、以下のとおり助成することを決定しました。

1. 平成13年度国際交流推進経費助成事業（後期募集分）

部 局 名	代表者職・氏名	相 手 機 関 名	派遣者数	招へい者数
農学生命科学研究科	教 授 林 良博	ソウル大学（韓国）、中国農業大学（中国）、チュラロンコン大学（タイ）、カセサート大学（タイ）、マレーシア農業大学（マレーシア）、フィリピン大学（フィリピン）、ガジャマダ大学（インドネシア）、ボゴール農業大学（インドネシア）、ハノイ農科大学（ベトナム）、台湾大学（台湾）		10
農学生命科学研究科	助教授 吉田 稔	ジョンズ・ホプキンス大学（アメリカ）		1
教育学研究科	助教授 今井 康雄	ダンディ大学（英国）	1	1
新領域創成科学研究科	教 授 大野 秀敏	セントルーカス科学・芸術大学（ベルギー）	1	
社会科学研究所	所 長 仁田 道夫	ベルリン自由大学東アジア研究所（ドイツ）		2
宇宙線研究所	所 長 吉村 太彦	アデレード大学 シドニー大学 オーストラリア国立大学（オーストラリア）	2	1

2. 平成13年度若手研究者派遣経費助成事業

部 局 名	申請者職・氏名	派 遣 先
工学系研究科	助 手 津島 悟	フランス
総合文化研究科	助 手 稲葉 治朗	ドイツ
薬学系研究科	助 手 楠原 洋之	ドイツ
新領域創成科学研究科	助 手 廣田 憲之	フランス
情報学環	助 手 劉 雪雁	台 湾
社会科学研究所	助 手 上村 泰裕	イギリス

3. 平成14年度東大シンポジウム開催経費助成事業

部 局 名	開催責任者職・氏名	シ ン ポ ジ ウ ム 名
医学系研究科	教 授 高橋 泰子	看護学の新展開－情報学とのドッキング
理学系研究科附属原子核科学研究センター	教 授 久保野 茂	原子核と宇宙国際会議
薬学系研究科	教 授 杉山 雄一	血液脳関門を介した中枢への薬物デリバリー：基礎研究と応用研究のブリッジング

第26回伊豆・戸田マラソンレース行われる

去る10月28日（日）、東京大学運動会主催の第26回伊豆・戸田マラソンレースが、東京大学戸田寮（スポーツピア戸田）をスタート及びゴールとした西伊豆地方で

行われた。

あいにくスタート時の朝7時から冷たい雨が降り始め、ランナーやスタッフに不安をよぎらせつつも、橋戸田寮委員長（理・教授）の合図により、91名のランナーが42.195kmのフルマラソンコース完走を目指してスター

トした。

伊豆・戸田マラソンレースは、マラソンコースとしては稀な500m近くの高低差があるため、ランナーにとっては過酷なコースであることに加え、レース当日は気温が低く、終始雨にたたられ厳しいレースとなった。

最終的には60歳という今大会最年長者を含めた77名のランナーが完走を果たした。

なお、優勝は大井寛己氏(卒業生)で、2時間47分23秒のタイムで昨年に引き続き優勝を飾った。

その他の主な成績は以下のとおりである。



スタート直前の様子



個人の部入賞者(左から2人目が優勝を飾った大井寛己氏)
(学生部)

1. 個人の部(総長杯)

順位	氏名	所属等	団体名等	時間
1位	大井 寛己	卒業生	個人	2時間47分23秒
2位	安達 裕司	〃	Doo-upカモシカ	2時間50分52秒
3位	岡 尚志	〃	エアロランナーズ	3時間 8分34秒
4位	田辺 克彦	〃	個人	3時間 9分58秒
5位	岩崎林太郎	法・学生	Doo-upカモシカ	3時間10分12秒
6位	山谷 歩	工・学生	個人	3時間12分 4秒

2. 団体の部(戸田村長杯)

〈上位3名の平均順位〉

順位	団体名	平均順位	上位3名の順位
1位	Doo-upカモシカ	5.3	2位、5位、9位
2位	ワングル・チャーリーズ	12.3	8位、10位、19位
3位	飛走会B	16.0	7位、11位、30位

3. 学内の部(運動会理事長杯)

順位	氏名	所属等	団体名等	時間
1位	岩崎林太郎	法・学生	Doo-upカモシカ	3時間10分12秒

4. 女子の部(戸田村体育協会長杯) 該当者なし

5. バカヤロー会(戸田寮委員OB会)長杯

〈体脂肪率がレース後の測定でレース前より一番増えた者〉

順位	氏名	所属等	団体名等	差
1位	室谷 大介	農・研究生	チームVMC	7.0

≡ 部局ニュース ≡

総長主催の外国人研究者交流会が開かれる

東京大学で研究教育に従事している外国人研究者を招き、親睦を深め、相互の交流を図るため、10月15日(月)に総長主催の外国人研究者交流会を開催した。参加者は約160名であった。

当日はよい天気に恵まれ、午後3時30分から4時30分まで、秋の深まりを感じる理学部附属小石川植物園を散策した。その後、山上会館において懇親会を開催した。高田康成総合文化研究科教授が司会進行し、佐々木毅総長の挨拶、井上正幸文部科学省科学技術・学術政策局次長の挨拶、小間篤副学長の乾杯発声で始まった。懇親会は始終なごやかな雰囲気の中に進められ、外国人研究





者を代表し、Xuehui Anさん（工学系研究科・中国）と、Dorothea Filusさん（人文社会系研究科・オーストラリア）から総長にお招きいただいたことへの謝意が述べられた。本学での教育・研究に関する情報の交換や、東京での生活、趣味の披露等々会話がはずみ、懇親会は午後7時過ぎに閉会した。

総合研究博物館小石川分館の開館

総合研究博物館は、小石川分館の完成を祝い、11月8日（木）午後3時30分から開館式典、内覧会、祝賀会を催した。

開館式典では、はじめに高橋進館長が挨拶し、小石川分館の設立に至る経緯、役割、展示の主旨等を述べた。続いて佐々木毅総長が、祝辞で小石川分館が総合研究博物館の大学に開かれた窓としての役割に大きく貢献するものであり、開館に寄せる期待は大きいことを述べた。また、文部科学省大臣官房・文教施設部長小田島章氏から祝辞をいただき、続いて、西野嘉章教授より小石川分館ならびに展示の主旨についても説明が行なわれた後、閉会した。

開館式後は、内覧会に移り、館内や外観を見学した。祝賀会は、館長の挨拶に続き、小間副学長の発声で乾杯した後、文部科学省大臣官房長結城章夫氏、日本学術会議会長で元東大総長吉川弘之先生、前総合研究博物館長川口昭彦先生から感銘深い祝辞をいただいた。

なお、文部科学省からは、官房長をはじめ小田島文教施設部長、井上科学技術・学術政策局長等大勢の方々の臨席を仰ぎ、学内からは、総長、小間、宮島両副学長、廣渡総長補佐、事務局長及び関係教官等にご出席いただき、出席者は138名となった。祝賀会は終始盛会で午後6時過ぎに終了した。

一般公開：11月12日～

土・日・祝日及び平成13年12月22日～平成14年1月6日は休館

A.M. 10:00～P.M. 4:30

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp>

ハローダイヤル：03-5777-8600



高橋 進総合研究博物館長挨拶



左から菊池総務部長、佐々木総長、高橋館長、結城文部科学省大臣官房長、坂本事務局長、小田島文部科学省文教施設部長

建物新営に伴う農学部構内の遺跡調査行われる

大学院農学生命科学研究科と分子細胞生物学研究所が入ることとなっている東京大学（本郷）総合研究棟の延9,000m²が農学部構内の東部分、農学部圃場内に建築されることとなり、建築予定地の埋蔵文化財調査が、東京大学埋蔵文化財調査室の手により2001年7月の試掘調査、9月より本調査が行われた。

今回の調査では、明治時代の遺構^{いこう}と江戸時代の大規模遺構が検出された（遺構とは堅穴式住居、建物基礎、ごみ穴、溝などを総称する考古学用語）。農学部、浅野地区、本郷地区の一部は江戸時代、水戸藩と小笠原家の屋敷であった。天保6年（1835）小笠原家の屋敷が水戸藩



説明に聞き入る参加者



大規模遺構と参加者



江戸時代の大規模遺構（人と比べると大きさが分かる）



出土品（人形、キセル、薬莖等）

邸となり、安政3年（1856）頃の江戸幕府の記録には、水戸藩の中屋敷、下屋敷、抱屋敷と記載されている。江戸時代の遺構の一つは長さ40m、幅11m、深さ4mの切通^{ちちゆう}で、さらに南北に伸びていた。もう一つの遺構は地下室^{かむろ}で、陶磁器、キセル、土製人形その他、貝などの食物残渣が出土した。明治時代の遺構は排水溝、ごみ穴で陶磁器、薬莖^{やつきょう}、ガラス瓶などが出土した。農学部敷地は弥生土器名称発祥地として東京都の史蹟に指定されており、弥生遺跡の存在が予想されたが、調査の結果、明治20年代に周辺地域が開発され、調査地点で2m削平されたことを確認した。したがって、仮に弥生遺跡が存在したとしても、明治期に失われたことが明らかになった。

この遺構、発掘物をもとに、発掘調査説明会が、10月16日に開催された。また、浅野地区武田先端知ビル地点

遺跡の弥生時代^{ほうけいしゅうこうほ}の方形周溝墓から出土した弥生式土器、ガラスビーズの展示も合わせて行われた。近隣住民、大学関係者約80人が参加し、埋蔵文化財調査室の原祐一助手により遺構、発掘物の説明および「東大構内遺跡出土のキセルの材質および亜鉛輸入と真鍮製造」と題する講演会が行われ、参加者は遠い江戸時代に夢をさせ聞き入っていた。

これで遺跡調査は終了し、10月19日に埋め戻され、東京大学（本郷）総合研究棟新築用地となる。

なお、出土品等の詳細は、別途埋蔵文化財調査室から報告書が発行される。

（大学院農学生命科学研究科・農学部）

大学院農学生命科学研究科・農学部外国人留学生見学旅行実施される

10月18日（木）から19日（金）にかけて農学生命科学研究科に所属する外国人留学生のバス見学旅行が実施された。

現在、農学部には29か国216名の外国人留学生が在籍しており、その内の留学生25名と教職員12名の併せて37名が参加した。

出発時はあいにくの雨模様だったが、最初の見学施設である国立極地研究所を訪問し、ビデオ等で南極観測隊の研究成果、極地圏の生物やオーロラ等の極地現象の説明を受け、雪上観測車等の展示物を見学した。

その後、バスは東北自動車道を経由して磐梯高原を目指し、宿泊場所となる国立磐梯青年の家に到着する頃は雨もきれいにあがり、美しい星空の下で各国の留学生と教職員がお互い協力しながら、野外バーベキューで楽しく懇談した。

続いて、体育館に移り全員で体を動かすゲームや歌等のレクリエーションで和やかな交流の一時を過ごした。

二日目は朝から晴天に恵まれ、出発前に磐梯山をバックに全員で記念撮影し、最高の青空と見事な紅葉とエメラルドグリーンやコバルトブルーの様々な色彩の五色沼を散策するハイキングコースで、留学生達は写真を撮りあったり、出会った人達とあちこちで小さな交流を楽し



磐梯山をバックに記念写真



極地研で説明を受ける



野外炊飯の準備をする留学生



野外炊飯の準備をする留学生

みながら思い出に残る日本の秋の一日を満喫した。

交通渋滞にも遭うことなく予定どおり農学部3号館前に到着し、教職員達の出迎えを受け飯塚国際交流委員長から二日間事故もなく楽しく留学生見学旅行が行われたことの挨拶があり散会した。

(大学院農学生命科学研究科・農学部)

大学院総合文化研究科・教養学部、大学院数理科学研究科合同で消防訓練が行われる

10月26日(金)午後1時半から、大学院総合文化研究科・教養学部3号館横で消防訓練が実施され、教職員約

100名が参加した。まず、9号館1階から出火したという想定で避難訓練があり、続いて消火器を使っての初期消火訓練、消火栓にホースをつないでの放水訓練が行われた。さらに起震車による地震体験訓練及び、参加者全員がテント内に充満した煙の中をくぐり抜ける煙体験訓練へと続き、最後に目黒消防署中目黒出張所長の講評と鈴木評議員の挨拶があって、訓練は滞りなく終了した。



(大学院総合文化研究科・教養学部)

東京大学教育学部派遣生の会研究集会開催される

10月10日(水)山上会館において「派遣生の会研究集会」が開催された。

今回の派遣生の会研究集会には、平日ではあったが、派遣生19名、名誉教授1名、教育学部教官7名の計27名の参加であった。

「派遣生」とは、全国各地の小・中・高等学校から教育委員会の推薦を受け、本学に派遣されて研究活動を行う現職の教員で、いつもは「学校の先生」である方々が、一年間「学生」となって本学に通う「都道府県派遣研究生」のことである。

現在は、教育学部のみが「都道府県派遣研究生」の受入れを実施しているが、開始当初は、文学部・理学部など多くの学部で受入れが実施されていた。この制度も今



パネルディスカッション風景

年で、教育学部の派遣生受入れ50周年に当たる。開始当初の昭和26（1951）年頃には、希望者も殺到し、30名の定員を超えることもあったというが、大学紛争のため受入れ中止が続いた昭和44・45・46年の3年間を境に、派遣研究生は減少し、一時は、わずか1名という年もあった。しかし、この50年間に「派遣生」として本学部に在籍した教員は、実に、557名を数え、その修了者は文字通り全国各地の教育界で活躍している。

今年度は、5名の現職の先生方が学んでおられ、当日の研究集会においても、各自の教育実践を基礎に、興味

深い研究発表がなされていた。

また、本学部の教官を交えたシンポジウムが「新しい時代を開く教育」と題して行われ、その後、本学部の浦野東洋一教授が、「附属学校長を体験して」と題して、具体的な事例に則しつつ、貴重な経験を講演された。

この制度は、大学院大学としての本学と、全国各地の初等・中等教育機関との、連携・協力関係を確立する重要なものであり、今後、一層の整備・充実と発展が期待される。

（教育学研究科・教育学部）

平成14（2002）年度大学院学際情報学府修士課程入学試験結果について

大学院学際情報学府は、平成14（2002）年度修士課程入学試験一次試験（筆記試験）を8月28日（火）に、二次試験（口述試験）を9月3日（月）及び4日（火）に

実施し、9月7日（金）に合格者を発表した。志願者数及び合格者数は、下表のとおりである。

H14（2002）年度東京大学大学院学際情報学府修士課程入学志願者・合格者数

コース	受入予定 人員	日本人/ 外国人	志 願 者			合 格 者		
			本 学	他大学	計	本 学	他大学	計
学際情報学	21	日 本 人	23	84	107	11	8	19
		外 国 人	2	14	16	1	3	4
		計	25	98	123	12	11	23
実践情報学	27	日 本 人	10	77	87	3	23	26
		外 国 人		9	9		3	3
		計	10	86	96	3	26	29
合 計	48	日 本 人	33	161	194	14	31	45
		外 国 人	2	23	25	1	6	7
		計	35	184	219	15	37	52

（大学院学際情報学府）

医科学研究所で慰霊祭行われる

医科学研究所では、同附属病院で亡くなられ、病理解剖させていただいた方々の御霊をお慰めするために、10月11日（木）午後1時30分から医科学研究所慰霊祭を挙行了。式は、参列者全員による黙禱に始まり、献体者御尊名の奉読の後、新井所長が、「御霊に捧げることば」を述べた。続いて、ご遺族及び医科学研究所教職員が献花を行い、最後に、浅野病院長からご遺族に対して感謝のことばがあり、2時過ぎ滞りなく終了した。

ご遺族5名、また、教職員の多数が参列し、献花を行った。

（医科学研究所）



「御霊に捧げることば」を述べる新井所長

ワークショップ「ジャーナリスト教育を科学できるか—その実験と教訓」終わる

東京大学社会情報研究所国際ジャーナリズム研究センター準備室は10月20日午後、同準備室主催のイベント第2弾として、本郷キャンパスの法文2号館1番大教室において、ワークショップ「ジャーナリスト教育を科学できるか—その実験と教訓」と銘打ったシンポジウムを開催した。会場には大学関係者および学生、報道機関、メディア産業から約70人の参加者が集まった。

社会情報研究所教育部では本年度からジャーナリスト教育の実践的な実験授業を開始した。本ワークショップはその試みを一般社会へ報告し、ティーチング・スタッフ（TS）とともにその経験を振り返り、今後の可能性を検討するために開催された。

午後1時に開始された同ワークショップでははじめ、同準備室代表の花田達朗教授が「ジャーナリスト教育がなぜ問題なのか」というテーマで報告をし、政治、文化、技術、社会、経済の各側面でジャーナリストの環境変化が起こり、その結果必然的に国内にも本格的なジャーナリスト教育の仕組が必要となってきたと整理し、それに大学は応えなければならないと述べた。次いで米ブルームバーグ・ニュース記者で同研究所大学院生の小田光康さんが「実験授業はどう行われたか」というテーマで、授業の目的と方針、そして教育方法を授業風景のビ



デオ上映を織り混ぜながら報告を行った。

さらに、実験授業でティーチング・スタッフ（TS）を務めた、辻祐司さん（共同通信社社会部次長）、フレッド・デボラックさん（米ウォールストリートジャーナル紙記者）、矢沢利弘さん（米ブルームバーグ・ニュース記者）、木村恭子さん（米ブリッジ・ニュース記者）の4人が壇上に上り、授業で扱ったテーマ、学生の反応、現場記者が教育に携わる意義などについて意見を述べ、パネルディスカッションを行った。なかでは米国のスクール・オブ・ジャーナリズムを修了したデボラックさんから米国でのジャーナリスト教育の現状とその効用について説明があった。

会場からは、企業内研修が機能しなくなったため中堅記者の再教育制度を確立してほしい、国内ジャーナリズムの品質向上や社会的な要請からも米国流の実践的なスクール・オブ・ジャーナリズムが早急に必要だ、などと日本においても本格的なジャーナリズム教育機関の設立を望む声が挙がった。一方で、頭でっかちの新人は必要ないなど、学部レベルでのジャーナリスト教育には否定的な意見も出された。

今回の試みは、大学側とメディア企業側がジャーナリスト教育の問題について、初めて正面からの対話を行ったことに意義があったといえる。両者はそれぞれ、この問題についてどう悩んでいるかを出し合い、多面的な解決法を模索していくという方向を確認し合った。今後は大学とメディア界が共同でこの問題に取り組むべきだ、との会場からの声が印象的だった。

（社会情報研究所）

駒場Ⅱキャンパス（駒場リサーチキャンパス）防災訓練

11月1日（木）駒場Ⅱキャンパス（駒場リサーチキャンパス）で合同の防災訓練が行われた。

同キャンパスでは、キャンパス全体で防災に取り組むべく『防災連絡会』が組織されていて、今回の合同訓練もその活動の一環として行われたものである。

火災発生を知らせる放送、警報とともに、防災センターからは消防署への通報、各研究室では実験中止、食堂・店舗では営業を中断し施錠、と一連の措置が迅速に



左から 生産研柳橋事務部長、目黒消防署予防課長、生産研坂内所長、先端研南谷センター長



消火器による消火訓練風景

なされ、全員が中庭に避難した。中庭では、まず防災センター要員の模範放水訓練が披露され、きびきびとした動きと手際よい技術に大きな歓声と拍手が沸きあがった。その後、消火器と屋内消火栓を使用した消火訓練、煙ハウス体験、そして振り落とされそうな阪神淡路大震災の揺れ（70％）の体験という具合に、目黒消防署員10名のご指導を受けながらの、盛りだくさんの内容であった。

これは、生産技術研究所が移転完了後、初めての合同訓練で、参加者は500名を大きく超えた。“備えあれば憂いなし”の言葉通り、いざと言う時に役立つ訓練であった。

（生産技術研究所）

柏キャンパス三部局合同一般公開開催

宇宙線研究所、物性研究所及び大学院新領域創成科学研究科三部局合同による一般公開が、11月2日（金）3日（土）の両日において柏キャンパスで開催された。

柏キャンパスは、移転当初から地域連携を重視しており、柏市役所、柏商工会議所、柏インフォメーションセンター（柏駅南口10月1日開設）及び東葛テクノプラザを通じての宣伝活動依頼が実り、開催前からたくさんの問い合わせが寄せられていた。

公開内容は、各部局において研究紹介、実験コーナー、特別企画の講演等それぞれ特色ある企画が行われ、キャンパス合同企画として相乗効果は大であった。

特に、昨年度ノーベル化学賞を受賞された白川博士の講演会では聴講者は約550名におよび主講演会場に収容しきれず、モニター放映されているロビー及び第一会議室での聴講となったが、同博士の親しみある講演内容に熱心に耳を傾けていた。他の講演会（宇宙線研）、FSフォーラム（新領域）についてもいずれも盛況であった。

両日とも、家族連れが目立ったが、特に、2日（金）は中・高生が多数訪れ、さながら、課外授業のような雰囲気であった。

3日午後からは雨となったにもかかわらず、昨年の入場者2,000名に対し今回は3,700名もの方々が訪れ、来場者は真新しいキャンパスに感心したり、丁寧な分かりやすい展示等の説明に納得して帰られた。

（柏地区事務部）



小学生向けイベントに参加している子供達



学校単位で貸しきりバスで来場した高校生達

≡ 掲 示 板 ≡

東京大学憲章に関するパブリック・コメントの実施を終えて

東京大学21世紀学術経営戦略会議（UT21会議）は、本学の長期的な目標を「大学憲章」という形で示すことは重要な意義があると考え、本会議がとりまとめた東京大学憲章に関する「論点整理（案）」に対する意見募集を実施いたしました。

この意見募集は、本学の教職員・学生を対象として平成13年5月21日から8月20日まで間、本学のホームページを通じて行われ、東京大学職員組合や学生自治会等を始め15名（教職員11名、学生4名）の方々、また、各部局（26部局）からもご意見を賜りました。

皆様のご協力に深く感謝いたします。

現在、皆様から賜りました貴重なご意見を基に、本会議の下に設置されている憲章準備小委員会において、論点整理を補充・確定する作業を行っており、11月末までに本会議に報告できるよう検討が進められています。

これ以降につきましては、確定した論点整理に基づく憲章を起草するため、12月には本会議の下に新たに「憲章起草委員会（仮称）」を設置し、国立大学の法人化をとりまく状況等を勘案しながら、平成15年3月までには大学憲章を策定する予定です。

今後これを機に、より多くの東京大学構成員の方々が、本学の将来像になお一層の関心をお持ちくださるよう熱望しております。

東京大学21世紀学術経営戦略会議
座 長 佐々木 毅

春期環境整備週間決まる

—11月28日～12月4日—

春期環境整備週を11月28日（水）から12月4日（火）までの1週間とすることが決定されました。

学内の環境整備については、日頃から各部局ごとに構内美化に努められているところですが、本週間は、大学にふさわしい環境の整備の一層の推進を図るため、特に春秋2回、日時、作業内容、区域を設定して実施するものです。

各部局はそれぞれの部局の周辺を、また、事務局は事務局庁舎、大講堂、三四郎池、七徳堂、懐徳館等の周辺を清掃しますが、本週間の趣旨を理解の上、ご協力願います。

東京大学教官懇話会のお知らせ

第30回東京大学教官懇話会（財団法人東京大学総合研究会主催）が、以下の要領で開催されます。多数の教官

の皆さんが参加されることを期待します。

〈テーマ〉「東京大学における『教育改革』（学部教育）のあり方について」

中等教育の内容・水準や若者の気質の変化、大学院生の国籍・進路の多様化などとともに、高等教育に対する社会的要請も変化しており、学部および大学院教育をとりまく状況は大きく変わりつつあります。こうした教育環境の変化に大学はどのように対応すべきなのか、同時に社会の短期的変化を超越して果たすべき大学の役割を引き続き果たしていくためにはどのような努力が求められているのか。こうした点について、その現状評価、すでに試みられている各種の改革構想の意義、今後採られるべき種々の方策などを含めて、自由に意見交換を行う場となることを期待しています。

〈話題提供者〉

荻谷剛彦（東京大学教育学研究科教授）

「教育改革と学部教育の課題」

石浦章一（東京大学総合文化研究科教授）

「学生の授業評価とその背景」

丹羽健夫（河合文化教育研究所所長）

「塾・予備校から見た今の教育」

藤原毅夫（東京大学工学系研究科教授）

「工学教育プロジェクトと教育プロジェクト担当教官制度について」

岡本和夫（東京大学数理科学研究科長、UT21教育体制検討委員会副委員長）

「教育制度改革の検討状況」

（講演順）

〈進行予定〉

はじめに主報告者の荻谷・石浦・丹羽三先生から、大学教育の実情をそれぞれの視点に沿ってお話しいたします。荻谷先生からは、御専門の教育社会学の立場から、文部科学省が進める教育改革の動向とその問題点をふまえ、学部教育の課題について総論的なお話をいただき、石浦先生からは、教養学部で実施された学生による授業アンケートの結果の解析を御紹介いただき、丹羽先生からは、大学に大きな期待を持っている若者を抱えている予備校の立場から教育問題への発言をお願いしております。

その後、藤原先生から、工学部において教育改革への一つ的手段として新しく設けられた「教育プロジェクト担当教官制度」について御説明いただき、最後に岡本先生から、「UT21教育体制検討委員会」が東京大学における教育改革に向けて、どのように問題を検討されようとしているのかについて披露していただきます。

以上の報告を踏まえて、引き続き自由討論を行っていく予定です。

〈開催日時〉平成13年12月3日（月）午後6時～8時

〈会 場〉山上会館（地階）食堂「御殿」

〈プログラム〉司会 小間 篤（東京大学副学長）
挨拶 佐々木 毅（東京大学総長）

〈参加資格〉本学の教授・助教授・講師

〈参加費〉 無 料
〈その他〉 懇話会には軽食を用意します。
*お問い合わせは、総務部学務課（内線22042）までどうぞ。

東京香港文化研究会 第1回公開講演会のお知らせ

日時 11月24日(土) 午後3:00~5:30
講師 黄淑嫻 (Mary Wong) 博士 (東大文学部外国人研究員)
題目 香港映画とジェンダ—1950年代から王家衛 (ウォン・カーウァイ) まで (日本語)
コメンテーター
野崎 歆 氏 (東大助教授、フランス文学者、香港・台湾映画評論家)
門間貴志 氏 (明治学院大学講師、アジア映画研究者)
場所 東京大学文学部法文二号館一番大教室
(正門より時計台に向かって右側二つ目の建物のアーケード内の時計台側入り口より入る)
会費 無料
案内請求先 E-Mail [fujisho@lu-tokyo.ac.jp](mailto:fujiisho@lu-tokyo.ac.jp)
(@luのlはLiteratureのlです)
藤井省三
〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学文学部中文学科
TEL 03-5841-3825
Fax 03-5841-3817

フィレンツェでのシンポジウム

本学海外学術交流拠点の1つである東京大学フィレンツェ教育研究センターは、その学術交流活動の一環として、来る11月24日、フィレンツェ市にあるステイッベルト美術館と共同して、「F.ステイッベルト・コレクションと16~19世紀の日本美術」と題するシンポジウムを同美術館にて開催する。フィレンツェ市では昨年10月、同センター開設一周年記念事業として、日本・イタリアの文化交流を多角的に検討する国際シンポジウム「日本の中のイタリア/イタリアの中の日本」(本学・フィレンツェ大学共催)が開かれ成功を取めたが、今回は美術の分野を中心にした研究集会となる。市の北部に広大な敷地を擁して建つステイッベルト美術館は、英国系フィレンツェ市民であったF.ステイッベルト(1838-1906)が収集した武具・工芸品を中心とする特色あるコレクションで知られるが、そのなかには、刀剣・甲冑・装束・漆器・磁器・屏風・巻物など日本からもたらされた約1800点の作品が含まれる。今回のシンポジウムは、同美術館において今後同一テーマで連続して開催予定の研

究集会の皮切りとなるもので、本学大学院人文社会系研究科の河野元昭教授が「狩野山雪と馬図」という題で基調報告を行うことになっている。昨秋のフィレンツェでのシンポジウム同様、学術上の成果が期待される。

「教養学部報」第451(11月7日)号の発行 —教官による、学生のための学内新聞—

三谷 博: 二一世紀は中国とともに—清華大学シンポジウムに出席して—
加藤光裕: 超弦理論—時空と素粒子の基礎理論を求めて
石浦章一: 学生による授業評価(試行)を終えて
野崎 歆: ベルギー翻訳家コレージュ滞在記
菅原克也: 日韓学術交流シンポジウム—女性からみた日韓文化「ことばと文学」
〈本の棚〉
金子邦彦: 安富歩著『貨幣の複雑性—生成と崩壊の理論』
〈時に沿って〉
宮岡洋一: わたしの数学事始め
ロバート・キャンベル:
高橋成雄: 一昔前のやりたいこと探し
「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、図書館入口、学生課ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。
(大学院総合文化研究科・教養学部)

大学院情報理工学系研究科創立記念行事

□創立記念シンポジウム「世界と社会に開かれた情報の拠点」
1. 日時: 11月26日(月) 13:00~17:00
2. 場所: 東京大学安田講堂
3. 入場: 無料(ただし準備のため(特に記念パーティ参加の場合は)11/15までに<http://www.iu-tokyo.ac.jp/news/kinen-sympo.htm>から参加登録していただくと幸いです。)
4. 内容
(司会) 情報理工学系研究科教授 辻井潤一
13:00 「研究科のめざすもの」
情報理工学系研究科長 田中英彦
13:15 祝 辞 総長 佐々木毅
文部科学省 高等教育局長(予定)
京都大学情報学研究科長 茨木俊秀
13:40 世界に開かれた大学
「大きな研究・おもしろい研究
—発想、運営から応用展開まで—
: CMUビジョンプロジェクトを例に」

カーネギーメロン大学教授 金出武雄
コメント 情報理工学系研究科教授
館 暉

「Joys of being an Academic Entrepreneur」

マサチューセッツ工科大学教授 Arvind
コメント 情報理工学系研究科教授
坂井修一

15:15 休憩

15:30 社会に開かれた大学

「グローバル戦略ソフトウェア開発と大学の役割」
日本IBM 常務、ソフトウェア開発研究所所長
内永ゆか子

「研究科の産学連携プログラムの発足」
情報理工学系研究科教授 石塚 満
「早大と東工大の取り組み」

早稲田大学教授 村岡洋一

東京工業大学教授 田中穂積

17:30 記念パーティ (山上会館にて)

□研究デモ展示:11月26日(月)12:00~15:30 安田
講堂にて

□研究室オープンハウス

11月27日(火)11:00~16:00 理学部・工学部各号
館の各研究室にて

□第1回情報理工シンポジウム

1. 日時:11月27日(火) 13:15~17:10

2. 場所:工学部2号館1Fセミナー室2

3. 入場:自由、無料

4. テーマ:「コンテンツ流通とネットワークの将来」

5. 内容

13:15 開会の挨拶

情報理工学系研究科教授 青山友紀

13:30 「コンテンツIDのコンセプトと技術」

国際・産学共同研究センター教授 安田 浩

14:10 「CDNアーキテクチャ」

情報理工学系研究科助教授 江崎 浩

14:50 休憩

15:10 「データセンタから発展したコンテンツ流通
ネットワーク」

アバヴネットジャパン(株)技術本部長 笹木一義

15:50 「モバイルサービスからみたコンテンツ流通」
NTTドコモ研究所所長 中野博隆

16:30 討論

17:00 閉会の挨拶

以上の問い合わせ先:情報理工学系研究科事務室

tel. (03) 5841-7926

(大学院情報理工学部系研究科)

駒場祭でシンポジウムを開催

《新聞は若者に何を伝えていくか》

来る駒場祭で、社会情報研究所による後援のもと行わ

れる、東京大学新聞社主催のシンポジウム「新聞は若者に何を伝えていくか」についてお知らせいたします。参加申込は不要ですのでお気軽にご参加下さい。

若者の新聞を読む時間が減少しているといわれる。最近の新聞調査では平均約4分の結果が出たようだ。読まれなくなった原因としては、インターネットあるいはネット携帯端末の普及により紙の新聞を必ずしも読む必要がなくなった点と、若者の活字離れそのものが挙げられる。このシンポジウムでは、特に後者の原因を重視し、最近活字メディアが若者に向けて発信する試み、さらに言うならば多彩な手段を用いつつ、若者を活字文化(特に情報発信源としての新聞)に引き戻そうと試みている状況全体を、インターネットや既存マスメディアのあり方をも視野に収め、議論を進めることとしたい。

日 時 11月23日(祝)=駒場祭初日 14時-17時

場 所 駒場・教養学部13号館1313号室

パネリスト 磯和春美(毎日新聞社放送事業部)

高比良美穂(朝日新聞社「セブン」編集長)

米田綱路(「図書新聞」編集長)

《司会》杉山光信(社会情報研究所教授)

備 考 入場無料

問い合わせ 財団法人 東京大学新聞社

(内線27974、np@utnp.org)

後 援 社会情報研究所

(社会情報研究所)

生産技術研究所 第10回技術発表会開催される

去る10月16日に生産技術研究所第1会議室において、第10回技術発表会が開催された。この発表会も回を重ねること10回目で、今春生みの親である初代実行委員長が逝去されたこともあってか、歴史を感じさせるものになりつつある。今回の参加者は、技術官、教官、院生、学外者を含め、例年並の76名であった。

当日は、生研の特徴どおりのバラエティーに富んだ10件の口頭発表が行われ、最新のプレゼンテーション技術を使った華やかな発表が多く見られた。そんな中でやや地味ではあったが、地に足をつけた技術の重みを感じさせる発表が目をついた。今後の技術発表会においても、このような地道な活動に裏打ちされた技術の重要性を訴えていくことが大事であるように思う。

発表会終了後には懇親会が開かれて、その宴たけなわの頃、須田研修委員会委員長より所長賞が発表され、会はおおいに盛り上がった。今回の受賞者は、千原正男氏(気体レーザー装置の製作と安全な使用法)と高橋岳生氏(環境無音境界層風洞の基本特性について)の2名である。

(生産技術研究所)

史料編さん所の特別展の準備すすむ

史料編さん所は、国の内外から史料を収集して研究し、『大日本史料』や『大日本古文書』など、日本史の基本史料集を編纂してきました。史料集の刊行は1901年にはじまり、今年で100年になりました。

これを記念し、12月11日から翌年1月27日まで、大規模な特別展「時を超えて語るもの—史料と美術の名宝—」が東京国立博物館平成館で開催されます（東京国立博物館と共催、文化庁後援）。ここには史料編さん所と東京国立博物館の所蔵品を中心に、国宝・重要文化財を含む古文書・古記録・絵図や絵巻など、貴重な史料と美術品160余点がならびます。

10月1日には記者発表も行われ、東京国立博物館の西岡康宏副館長（館長事務取扱）、史料編さん所の黒田日出男画像史料解析センター長（特別展実行委員長）が挨拶に立ち、保谷徹助教授（実行委員会幹事）から集まった報道関係者（53社、61名）へ特別展の内容が披露されました。

展示は三部構成からなり、第1部：史料・美術展示、第2部：東京大学史料編纂所のあゆみ、第3部：歴史学のデジタル・ミュージアムとなっています。第3部は大学院情報学環の研究室の協力を得ています。

現在ポスターやちらしの準備もすすみ、学内でも広報活動へのご協力をいただいています。詳しい紹介は、史料編さん所のホームページに掲載しました（東大ホームページよりリンク）。ぜひご参照の上、一人でも多くの方のご観覧をいただけるようお願いいたします。

(http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/100ex/hi_expo_index.html)

(史料編さん所)

国際シンポジウム「歴史学と史料研究」のお知らせ

東京大学史料編纂所は2001年が『大日本史料』等の史料集発刊100周年にあたるのを記念して、国際シンポジウム「歴史学と史料研究」を開催いたします。

日時 2002年1月25日（金）・26日（土）

場所 東京大学山上会館

第1日（25日）は「史料の研究・編纂をめぐる諸問題」と題してドイツ・フランス・韓国・イエズス会等における史料研究・編纂の歴史と現状・課題についての報告を受けて討議を行い、第2日（26日）は「史学史の再検討」と題して宮地正人国立歴史民俗博物館長をはじめとする内外の研究者に史料編纂所の歴史を中心とする史学史上の諸問題についての報告を受けて討議を行います。報告者名・報告題目等は史料編纂所のホームページ（<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>）をご覧ください。

聴講を希望するかたは、葉書に「シンポジウム聴講希望」と明記し、聴講希望日（両日参加も可）・住所・氏

名・年齢・職業または所属（学生の場合は学年も）・電話番号・e-mailアドレスを記し、11月30日必着で、下記までご送付ください。

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学史料編纂所庶務掛 電話03-5841-5943/5944

(史料編さん所)

東京大学物性研究所国際シンポジウム一般講演会開催される

東京大学物性研究所では去る10月6日（土）午後2時から、千葉県柏市・柏市教育委員会との共催で「さわやかちば県民プラザ」において、R.B.Laughlin 博士（スタンフォード大学教授・1998年ノーベル物理学賞受賞）、秋光 純博士（青山学院大学教授）を迎えて「国際シンポジウム一般講演会」を開催した。講演会では、さまざまな物質の構造や性質を物理の基本原則から解明する理論の開拓、新しい超伝導物質を発見するまでの興奮と驚きの道のりなどについて話され、講演後活発な質疑応答などが行われた。現代の物質科学研究の最前線についての講演ということもあり、聴衆者400名を超えた意義深い講演会となった。



ノーベル物理学賞受賞のR.B.Laughlin博士の講演

(物性研究所)

保健センター・公開健康講座

『医学の立場から見た環境問題 ～今、人の体に何が起こりつつあるか～』

この夏の暑さは多くの人に地球環境の変化への目を向けさせたと思います。しかし地球温暖化のプロセスは今急に始まった訳ではありません。それは産業革命以来の

約二百年の経過を経て起きてきた事です。誰の目にも明らかになってきたのが僅かにこの数年と言うにすぎません。

人の体の変化についても、恐らく、同様の事が起きてきていると思われます。環境の変化は既に人の体に少なからぬ異常を及ぼし始めているのです。にも関わらず気温の変化と異なり、多くの人はまだその事を実感できないでいる様です。しかし状況は皆さんが思っているよりも遥かに悪い方向に進んでいます。

それに加え、遺伝子操作やクローン技術等、最近の医学や科学の進歩がもたらした新たな環境問題も出現している現況です。

我々人の体を取りまく環境の変化とその影響の現状認識と言う意味で、医学の立場から論じたいと思います。

講 師：保健センター内科 奥田俊洋

日 時：平成13年11月29日（木）午後4時から

場 所：山上会館 会議室201・202

問い合わせ先：保健センター健康管理室 内線22579
(保健センター)

第2回東京大学公開学術講演会の開催

「昴さざめく小夜－思索の森へ」

前号（No.1223 10月24日）に掲載しました、第2回東京大学公開学術講演会「昴さざめく小夜－思索の森へ」の開催の詳細が下記のとおり決定しましたので、お知らせします。

○ 講 演

「精神の危機－ヨーロッパと日本」

坂部 恵（東京大学人文社会系研究科名誉教授）

「フランスの中世末期の武勲詩」

松村 剛（東京大学総合文化研究科助教授）

「ナノ世界の電子の魅力と威力」

榎 裕之（東京大学生産技術研究所教授）

日 時：平成13年11月30日（金）

場 所：東京大学大講堂（安田講堂）

定 員：800名（当日先着順）

事前の申し込みは必要ありません。

参加費：無 料

問い合わせ：東京大学「学術講演会事務局」

TEL：03（5841）2046

FAX：03（5802）8856

E-mail：campus@adm.u-tokyo.ac.jp

主 催：東京大学・(財)東京大学総合研究会

本郷地区構内（浅野地区、弥生地区を含む） における警備体制の整備充実について

最近、本郷地区構内において、窃盗、暴力、恐喝等の事件が相次いで発生いたしました。

このような憂慮すべき事態に際し、事件の再発を防止し、学生・教職員の安全を確保し、教育研究の場としての静謐な環境を保持するため、構内警備体制の整備充実の方策について、鋭意検討してまいりました。

検討の結果として、本郷地区構内の道路・広場等の警備を専門の警備会社に委託することが必要かつ適切であるとの判断に至り、関係の会議において、このことが本学の方針として了承されました。

今後、本郷地区構内の警備業務は専門の警備会社によって行われることとなりますので、このことについて、学生・教職員の方々にご理解いただきますようお願いいたします。

なお、具体的な警備実施体制については、実施に必要な準備が整い次第改めてお知らせいたします。

東京大学安全対策室
室長（副学長）宮島 洋



≪ 事務連絡 ≫

人 事 異 動 (教官)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
13. 11. 1	SEKIMORI GAYNOR MEREDITH	(採 用) 東洋文化研究所助教授	ロンドン大学日本宗教研究所主任研究員
13. 10. 16	山 口 猛 央	(昇 任) 大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科講師
〃	渡 邊 正 峰	大学院工学系研究科助教授	大学院工学系研究科助手
13. 11. 1	大久保 明	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科助教授
〃	鍾 非	大学院総合文化研究科助教授	大学院経済学研究科助手
〃	相 澤 清 晴	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
〃	佐久間 一 郎	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
〃	堀 宗 朗	地震研究所教授	地震研究所助教授
13. 11. 1	大 杉 立	(転 任) 大学院農学生命科学研究科教授	農林水産技術会議事務局研究開発企画官
〃	後 藤 晃	先端経済工学研究センター教授	一橋大学イノベーション研究センター教授

人 事 異 動 (職員)

発令年月日	氏 名	異動内容 (新官職)	旧 (現) 官職等
13. 11. 1	太 田 正 孝	施設部建築課専門職員	施設部建築課工事計画掛長
〃	宮 崎 正 芳	施設部建築課工事計画掛長	施設部建築課設計第一掛長
〃	鈴 木 久 雄	施設部建築課設計第一掛長	施設部建築課設計第二掛長
〃	内 藤 哲 男	施設部建築課設計第二掛長	東京外国語大学施設課建築第一係長
13. 11. 1	若 林 賢 一	(転 出) 東京外国語大学施設課建築第二係長	施設部建築課工事計画掛主任

≡ 訃報 ≡

磯部 孝 名誉教授

本学名誉教授磯部孝先生が、10月7日（日）に逝去されました。享年87歳でした。

磯部先生は、昭和12年東京帝国大学理学部物理学科を卒業後、同17年から19年の間、陸軍技術本部から東京帝国大学大学院特別研究学生として派遣され、本学で研究に専念されました。昭和20年本学第一工学部に計測工学科が設立されるのに際し、講師に任命され、同21年に助教授、23年には教授に就任されて、昭和49年に東京大学を停年退官されるまでの29年の長きにわたって、本学工学部において研究・教育に当たられました。

先生が戦時中に従事された水中弾道に関する研究は、水面に向かって発射された弾丸の水面における跳飛現象と水中における運動の詳細をはじめて解明した研究であり、前人未踏の新分野を開拓した画期的なものでした。

その後、新しい工学分野である計測工学の発展とその体系化に力を尽くされました。特に、信号処理に関しては、制御系の特性測定など広い領域において不規則信号を利用する相関法が有効であることに着目し、その技術



を確立して以後の計測制御工学の発展に多大な貢献をされました。そのことは、『相関関数およびスペクトル』というこの分野のキャノンともいべき著作をとおしても広く知られるところです。

先生は、「身の回りの物理学」の世界を語り合う「ロゲルギスト」という私的な研究会を、先生と心を同じくする方々ともたれており、その成果が『物理の散歩道』というシリーズ本として出版されています。先生が寺田寅彦先生から引き継がれた、この「身の回りの物理学」という素晴らしい世界にあこがれて、計測工学の道を志した学生も多数いたと聞いております。

このように、先生の純粋で誠実かつ高邁なお人柄と広い識見、先見性豊かな研究指導とを慕って、大勢の優れた若い学生が学内外から集まりました。その中から計測工学のみならず、それから派生した様々な新領域や新分野を切り開く多くの優れた研究者や技術者が育ち、現在の内外の産業界や大学、研究機関で活躍しています。

先生の御冥福を喪心からお祈り申し上げます。

（大学院工学系研究科・工学部）

杉浦 克己 名誉教授

本学名誉教授杉浦克己先生は、去る8月7日（火）、出血性ショックのため横浜市内の病院で逝去されました。享年64歳でした。

先生は、愛知県のご出身で、1963年本学経済学部をご卒業後、同大学院経済学研究科に進学され、その後、法政大学経済学部専任講師を経て、1970年10月から東京大学教養学部専任講師として着任されました。1972年に助教授に昇任、そして1984年には教授に昇任されて、1998年3月停年退官まで27年6ヶ月の間、東京大学で経済学の研究と教育に専念されました。退官後は、帝京大学経済学部教授として、引き続き経済学の発展のために尽くされました。

先生は生真面目で責任感が強く、学内においては、教養学部社会科学科長、同総合社会科学科主任など多くの役職を歴任するとともに、学外においても、経済理論学会幹事、進化経済学会理事などの重責を果たされ、東京大学ならびに学界の発展に尽力されました。

先生の御業績は、産業循環論、現代資本主義分析、資本主義発展論、相関社会科学方法論の各分野に大別することができます。まず、産業循環論の分野では、産業循環のダイナミズムを通して商品経済の諸カテゴリーの生



成、発展を説く動態的原理論の再構築を試みるなど、マルクス経済学研究の高度化に多大な貢献をなされました。また、現代資本主義分析においては、経済と政治、経済と国家との相互関係に踏み込んだ新しい政治経済学の構築を試みられました。さらに、資本主義発展論では、資本主義の生成、発展、変容のダイナミズムを体制変動論的にとらえる分析で優れた業績を残されました。最後に、相関社会科学に関しては、アダム・スミス研究を始めとして、経済哲学や経済思想、さらには市場と社会の相互作用に着目して経済進化の過程を総合的にとらえる進化経済学の方法にいたるまで、学問のフロンティアで意義深い研究を展開されました。

先生の主著『コミュニケーションの共同世界』（1993）は、諸科学の基盤にある共通の思考様式を取り出すことによって、経済学そのものを相関社会科学学的にとらえ直そうとした画期的な労作であり、後進の研究者にとって大きな励みになっています。還暦を過ぎてなお新たなテーマに挑戦しつづける先生のお姿は、常に若々しく魅力的でしたが、先生の警咳に接する機会があまりにも早く奪われてしまったのは、痛恨の極みというほかありません。ここに謹んで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（大学院総合文化研究科・教養学部）

塩谷 繁雄 名誉教授

本学の名誉教授 塩谷繁雄先生は平成13年10月17日（水）急逝されました。享年78歳でした。

先生は昭和20年9月東京帝国大学第二工学部応用化学科を卒業された後、同第一工学部助手、横浜国立大学助教授を経て、昭和34年10月東京大学物性研究所助教授に着任されました。昭和42年1月には教授に昇任され、昭和59年3月停年により退官されるまで、本学教官として研究と教育につとめられました。この間昭和55年4月同研究所の大部門制への拡充改組においては、極限物性部門において極限レーザープロジェクトの設立に尽力されました。



東京大学においては同大工学系研究科委員会委員、東京大学図書行政評議委員などを歴任され、学外においては学術審議会専門委員などをつとめられました。さらに昭和50年日本で開催されたルミネッセンス国際会議（日本学術会議主催）、昭和53年に開催された第6回超高速現象国際会議をはじめ多数の国際会議において、組織委員長としてその実現と運営に大きく貢献されるなど、世界の研究者の交流推進に尽力されました。

研究においてはルミネッセンス、光物性、量子エレクトロニクス等広範な領域において、関連分野の研究を国際水準に高めることに大きく貢献をされました。ルミネッセンスの研究は、今日世界をリードする蛍光体や

ディスプレイ産業の発展の基礎となっています。

先生は固体光物性と量子エレクトロニクスの境界領域の開拓に努力を傾けられました。この中でも特にピコ秒レーザーを用いた固体の時間分解分光はその後の発展の先駆けとなりました。この研究により昭和52年12月第23回仁科賞を受賞されました。さらに昭和59年8月ルミネッセンスの分野の世界的会議であるルミネッセンス国際会議において第1回の国際会議賞を受賞されました。平成12年4月には勲三等旭日中暖章の榮に浴されました。

先生は気さくで面倒見の良い人柄で、いつも人に囲まれていました。お酒が好きで若い研究者と愉快地話すのを何より楽しみにしておられました。このような環境から多くの優れた研究者が輩出し、広い分野で活躍しています。

停年退官後は本学の名誉教授になられるとともに、東京工科大学で光物性の研究に励まれました。先生は旅や登山が趣味で本学在任中からたびたびヒマラヤ山脈などに旅されました。ほんとうに丈夫で亡くなる1ヶ月前にもドイツの国際会議に出席され、同時多発テロの影響でヒマラヤに行けなくなったことを残念がっておられたそうです。また亡くなる数日前にも奥様と思い出の地上高地を旅されたと聞きます。名古屋での国際会議に出席される途中のあまりに急なご逝去でした。

ここに先生のご功績とお人柄を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（物性研究所）

生命倫理サロン

大学院人文社会系研究科では多分野交流演習やコース共通演習を行って、専門分野を越えた学問的視野の拡充を目指している。本年度、倫理学の竹内整一教授を主査とする多分野交流演習「人間の尊厳、生命の倫理を問う」はなかなかの活気を見せている。学外からの講師や出席者の発言も刺激的だが、学内諸処の教官、学生も加わっての討議は意外性に富み、かみしめてみるとなかなかの味わいだ。

私は「ヒトの胚」から取り出した幹細胞（ES細胞）の研究をめぐる倫理的問題と、その問題に宗教的な立場からどのような関与が求められているのかについて報告した。実はこれは私が関わっている国の生命倫理問題の審議の経験に基づくものである。現在、首相を議長とする総合科学技術会議の下での生命倫理専門調査会でヒト胚や胚性幹細胞研究の倫理規制の審議が行われている。ゲノム研究と並んで、「バイオの時



代」のもう一つの焦点である「再生医療」の可能性にも関わり、苛烈な国際競争に追われて忙しい。ところが、委員の一人として情けないことだが、生命倫理をめぐる国の審議は十分ではない。なぜか。たくさん理由は見つけられるが、人文系、社会系、自然科学系の学問的交流の薄さ、相互の無理解、基本的な信頼感の欠如が大きな理由の一つだということは認めざるをえない。

話はとぶが、近年の人の集まり方は、論題の処理に集中し、終わるとサット散るといふことが多い。

それはそれでよいが、ちょっとしたタメをどこかに作れないものか。ほんの数分でもよいから、人間的交流を含んだ知的なやりとりの喜びをキャンパスの内外にもちたい。どんなわずらわしい委員会でも、そうした交流の雰囲気の数秒間でも織り交ぜられれば、大成功というべきではないか。そんな交流の集合からなるヴァーチャルな「生命倫理サロン」を育て、個々人の独自の声を響かせあい、市民それぞれの現場へもどせるような、「いのちをめぐる知」の宴を空想してみても……。

(文学部宗教学 島蘭 進)

(淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

[次号の原稿締切]

11月20日(火)午後5時

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

No 1224

2001年11月14日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎ (3811) 3393

e-mail kouhou@adm.u-tokyo.ac.jp

ホームページ <http://www.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>